

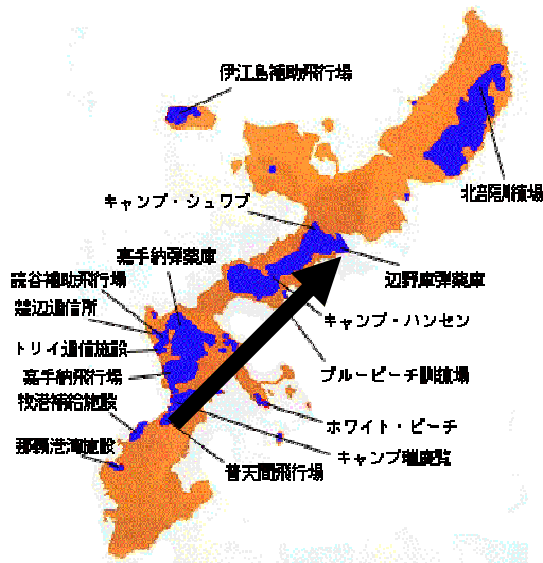
普天間基地移転問題

その歴史と現状・これからを考える

国内旅行で伊丹空港に着陸する直前、右のような景色を眼下に見ることが出来ます。

伊丹空港は滑走路が先にありきで、あとから周囲が開発されて街が形成されましたが、普天間はそうではありません。

昭和二〇年（一九四五年）米軍が沖縄に上陸した六月、日本本土を攻撃するために普天間基地が建設されました。そこは村役場、学校、集落がある生活の場でした。平坦な村の中心部を文字通り銃とブルドーザーで滑走路を作り直した。ハーグ陸戦法規は戦闘中であっても民衆の財産権を侵害しては



写真・図はインターネットから転写 国方

ならないし、戦争が終わったら速やかに返還すべきと規定しています。命からがら生き延びた住民がもと住んでいた場所にもどってきたら、土地所有者の了解を得ることなく米軍は「勝者の権利」とかで居座ったまままで今日に至っているのが現状なのです。

伊丹と違うのはこれだけではありません。離着陸機数は比較にならないほど多く、危険も多い。二〇〇四年八月、沖縄国際大学にヘリコプターが墜落しました。幸い人的被害は出ませんでした。が、一歩間違えば大惨事です。そして米軍は大学構内に強制的に立ち入り、日本人が近づけないようにしました。沖縄を独立国家の一部として見ないような対応でした。

普天間から辺野古に移転する案は一九九六年橋本内閣のとき日米特別行動委員会の合意で決められました。米軍の再編成という世界戦略の一環で老朽化した普天間を返す代わりに、辺野古の弾薬庫に近くに大きな港を作り、二本の滑走路を持つ新鋭基地建設、すばやく弾薬を積み、攻撃ヘリを載せた艦船が世界に急速展開できる構想です。

一九九七年七月、銀行革新懇主催の沖縄ツアーに参加して、普天間・嘉手納基地と南部戦跡を見て回りました。海がすごくきれいですね。

座り込みを続けている辺野古の様子は、辺野古浜で検索するとインターネットでリアルに見ることが出来ます。お試しください。